新刊紹介

麻田豊監訳・露口哲也訳注　N・A・チシュティー

『パンジャーブ生活文化誌 ― チシュティーの形見 ―』

東洋文庫七〇二　平凡社、二〇〇二年、三五八ページ

小西　正捷

トヨタ財団による研究助成についてはよく知られているが、その活動のうちに、「隣人を知ろう」プログラムというのがある。一九七八年にはじまったこのプログラムは、はじめは東南アジア、ややのちには南アジアも含めた諸国間の相互理解の促進を目的として、文学・社会・文化・歴史・経済等に関する出版物を相互に翻訳・出版する事業に対し、助成しようとするものである。これはアジア諸国の出版物を日本語に翻訳、あるいは日本の出版物をアジアの諸語に翻訳して出版するのみならず、アジア諸国間の出版物をも相互に翻訳出版するものであり、ことにこの最後の点が大いに評価されるところであろう。実際これによって、実に数多くの本がアジア各国間で紹介されることになり、日本でもアジアの言語で書かれた本が翻訳紹介され、また多くの日本の本がアジアの諸語で出版された。

日本向けの本としては、はじめのうちは東南アジアの文学作品が多かったが、やがて八〇年代後半からはネパールやスリランカの書籍も対象となり、また九〇年代からは、インド・パキスタン・バングラデシュの書籍も出版の対象となった。このプログラムでの本の選定委員の一人であった筆者は、東京外国語大学の麻田豊氏と相談のうえ、パキスタンに関する人類学・民俗学の本を二冊選んだ。それがフレドリック・バルト『スワート最後の支配者』（勁草書房、一九九三年）であり、もう一冊が、ウルドゥー語で書かれた歴史的民族誌とも言える本書である。前者は立教大学大学院地理学専攻前期課程修了（現・京都大学助手）の子島進君、後者は同史学専攻後期課程の露口哲也君に訳出をお願いし、幸い、ともに麻田氏に監修していただいた。

さて、本書は一八五九年にパキスタンのラーホールで出版された、ヌール＝アハマド・チシュティー著『ヤードガーレ＝チシュティー』の訳である。著者はインド亜大陸北西部パンジャーブ地方の古都ラーホールの旧家に生まれ育った教養ある教育者で、イギリス士官に対し、統治の歴史や宗教・社会的事情などを教授する役職に就いていた。そのためその立場は、伝統的なムスリム文化人であると同時に、リベラルな現代的知識人としてのそれであった。したがっ

て、民間のムスリムが「迷信」にも近いかたちで聖者崇拝などに熱を上げるふうを断罪し、ときには奇術まがいの「奇跡」のいかさまをつきとめて自らそのタネ明かしをしてみせたりする一方、原理主義のゆえに反英に走るサウディアラビアのワッハーブ運動をも批判する。概してその筆は硬く、いかにも教育者らしい生まじめなようすであるが、礼拝を導く導師のムッラーを批判するくだりは面白い。モスク内の放屁は一〇〇人の天使を殺すとされているが、それならムッラー、いったいどれほどの天使を大量殺戮したことか、と嘆く彼である。

宗教的な立場はともかくとしても、数百年は続いたであろう旧家の生まれである彼は、この古都ラーホールの歴史と地誌、またそこに住む人々の暮らしの詳細を語る、絶好の人物であることに疑いはない。本書は、いまから一五〇年も前のラーホールにおける暮らしのありさまを伝えてくれる社会史上の貴重な史料であると同時に、宗教とも深くかかわる年中行事、すなわち全ムスリムに共通の大祭や特定聖者の命日祭であるウルス、また誕生・割礼・結婚・死にさいしての多様な人生儀礼の詳細を、しかもコウム（ヒンドゥーのカーストにも比しうる社会集団）ごと、あるいはザートという出自集団ごとに、もれなく記述していく。それはまさに、「民族誌的現在」における最良質な民族誌・地誌であるといえるであろう。

本訳書においてさらにその価値を高めているのが、露口氏による全七〇ページ余、総計二五三件に及ぶ詳細かつ丹念な訳注と、二〇ページ余にわたる解説である。正確な訳と詳細な注を付けるにあたって参照された文献は五十数点、その大半がウルドゥー語かペルシア語・アラビア語であるのもうれしい。

ただし、もし注によりつつ本文をじっくり読もうとするならば、かえってこのような詳細な注によって日本語の流れが極端に悪くなり、ひどく時間もかかってしまうことにもなりかねない。一つの方法は、正確を欠くという点で学術的には問題があるとしても、無理してでもカナ書きされたタームを比較的それに近い日本語で言いかえるか、巻末にグロッサリー（用語一覧）を付けておくことであろう。詳しい索引の一部にその語の意味を付しているものもあるが一貫していないため、この点、やや不便である。また、簡略なものでよいから、パンジャーブ地方とラーホール市街の地図がほしかった。

もうひとつの問題は原著自体にあり、日本でも郷土史家の著作などによくあるように、全体の章立てがいかにもうまくないことが気になる。取り上げられたテーマの配分量もアンバランスであるが、その配列が、部・章・節・小見

出し等として要領よく整理されていない。訳者も最低限、記述の入れ替えや章・節などの再設定に工夫をこらしたようであるが、この点は解決をみたわけではない。とはいえ、史書として、また地誌・民族誌として本書がもつ意義はやはり大きく、監訳者・訳注者はもとより、訳出を助成されたトヨタ財団、ならびに権威ある東洋文庫シリーズでの刊行を決断された平凡社の英断にも拍手を送りたい。

（立教大学文学部史学科教授）